

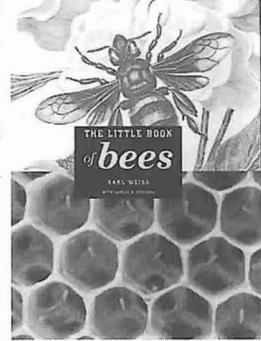
## 参考図書紹介

### ハチ類についての話

Karl Weiss. The little book of bees. Springer-Verlag New York, Inc. 163pp. 2003. ISBN0-387-95252-7.

この小冊子で、著者はハチと言っても単にミツバチだけでなく、多くのハチの社会がいかに複雑で、かつ高度に組織化されているものであるかということを見せてくれている。この本では、最初にハチ達の動物界での進化の位置について説明し、昆虫としてのハチ類、社会性昆虫の特徴について述べている。また、単独性のハチの中で、堅い粘土地に垂直に巣穴を造るものや、枯れた植物の茎を好んで巣を造るもの、葉を切り取る巣を造るハキリバチ、竹筒などの筒に巣を造り、各巣の仕切りに練り土や植物の葉を利用するツツハナバチ類、幼虫の餌として花粉やクモ、バッタなどを選ぶものなど、そのすばらしい生態を分かりやすく解説している。世

界に生息している400種のマルハナバチの内、主なマルハナバチの生態や特徴、また熱帯地域に300種以上が生息しているハリナシバチの魅力についても述べている。最も高度な社会性昆虫であるミツバチは、オオミツバチ、ヒマラヤオオミツバチ、コミツバチ、トウヨウミツバチ、サバミツバチ、そして産業養蜂種としてのセイヨウミツバチについて、生理、生態が簡潔にまとめられている。ここ数年の間に、相次いで独立種や新種となったクロコミツバチ、クロオビミツバチ、キナバルヤマミツバチについてふれられていないのが少し残念である。(吉田忠晴)



### 舌でも楽しめるハチミツの文化誌

ガジェットブックス アンビエント② 蜜の味 A Taste of Honey. 株式会社エクスプランテ. 31pp. 2002. 3,600円(税別). ISBN4-901300-09-1.

ガジェットブックスは風変わりな企画「書籍」で、本書は「香料」に続く「アンビエント」シリーズの第2弾である。贈答品として価値を見だしやすいと一般評にあるように、最大の特徴は、ガジェットブックス全体に貫かれている実物同梱主義。テーマにちなんだ実物入りで、視覚以外の感覚を動員させ、行動をも起こさせる。もちろん、本書「蜜の味」はハチミツの多様さがその面白みを引き立てる。9個の小さなガラス容器に納められた8種のハチミツ(各20g)と花粉がセットになっていて、目で楽しみ(標本箱のようなレイアウトも含めて)、香りを楽しみ、味わって楽しむ(ご丁寧にもテイ스팅用オリジナルスティックまである)「本」である。このためこの「参考図書紹介」の

中で本来字義通りに紹介すべき文字情報部分は、全32ページのブックレットに制限され、書籍全体の値段や大きさの割にはいかにもかわいらしい。内容的にも特筆する目新しさはない。しかし、本書はその内容ではなく、そのスタイルが「参考」になり、「紹介」するに値するといえそうだ。ページをまたがる長い文章を排し、ミツバチやハチミツについて、気軽に読ませる工夫がされている。ハチミツにも種類があることに気づき、それじゃあ、味のちがいがわかるかどうか舐めてみよう、と思わせる。実物があるので、興味はその場で行動に変わる。ミツバチは匂いと味を連合学習して、後に匂いを嗅いだだけで、舌を伸ばすようになる。読者もハチミツの味と文化を連合学習することになるだろう。次にハチミツにまつわる話を聞くと、またハチミツを味わいたい衝動に駆られるにちがいない。(中村 純)